

数学・数理解析専攻（数学系）修士課程入試の合否判定基準および志望研究分野調査書の変更について（新旧対照表）

（合否判定基準の新旧対照表）

変更前の合否判定基準	変更後の合否判定基準
<p>・基礎科目・専門科目及び英語の筆答試問の成績、口頭試問の評価を、総合的に判断して合否を判定します。</p> <p>・口頭試問では専門分野の適性および知識、研究に必要なコミュニケーション能力、研究への意欲などを評価します。</p> <p>・口頭試問の評価が合格基準に達していない場合には、筆答試問の成績如何にかかわらず、不合格となることがあります。</p> <p>・数学系では、入学後博士後期課程へ進学するための要件の一つとして博士後期課程進学資格試験(QE)を課しています。QE は数学の基礎知識の確認のための筆記試験と口頭試問よりなります。筆記試験は8月頃と2月頃に行われ、筆記試験で十分な学力が認められた学生に対しては、後日口頭試問が行われます。それに合格すると博士後期課程に進学する資格が得られます。実際に博士後期課程への進学は修士論文の審査を経て決定されます。数学・数理解析専攻数学系修士課程入学試験において優秀な成</p>	<p>・合否は、提出された出身大学での成績、筆答試問の得点、口頭試問の評価および調査書・レポートの内容を、希望中区分を考慮して総合的に判断して決定します。このため合格は筆答試問の得点順にならないことがあります。また希望中区分によっては第1希望の中区分で合格とならないことがあります。1次合格の判定は主として基礎科目の得点を元に行います。1次合格者に対して口頭試問を行い、専門科目および英語の得点と合わせて専門分野の適性および学力などを評価し合格の判定を行います。このため口頭試問の評価が合格水準に達していないときは、筆答試問の得点の如何に関わらず不合格となることがあります。</p> <p>・数学系では、博士後期課程進学資格試験(QE)を実施しています。QE として数学の学識と今後の研究計画を審査するための口頭試問を秋頃に行います。なお QE を受験できるのは原則として修士課程入学後在学1年以内とし、在学中に受験できる回数は1回とします。数学・数理解析専攻数学系修士課程入学試験において優秀な成績をおさめた受験生は入学後に QE を免除されることがあります。QE の合否にかかわらず、修士課程から博士後期課程への進学時に進学試験を行い進学の合否を判断します。進</p>

<p>績をおさめた受験生は入学後に QE が免除されることがあります。</p>	<p>学試験では口頭試問を行い、修士論文の内容と今後の研究計画に沿って合否を判断します。QE に合格していない学生も進学試験の受験は可能ですが、進学試験に加えて QE 相当試験として追加の口頭試問を行います。この QE 相当試験の合格基準は QE 試験と同等とします。この QE 相当試験に不合格の場合、進学は認められません。</p>
---	---

(志望研究分野調査書の新旧対照表)

変更前の志望研究分野調査書	変更後の志望研究分野調査書
<p>(1) 希望する研究分野を、下の中から選び、下の枠内に記入して下さい。第 1 希望分野は必ず書いてください。原則として面接は第 1 希望分野で行います。第 2、第 3 希望分野が不明の場合は未定と記入してください。また希望分野の下の枠内に希望する指導教員または、希望する分野の詳細(例えば、代数幾何学、微分幾何学、PDE など)を記入してください。第 1 希望分野、第 2 希望分野、第 3 希望分野はすべて異なる分野を記入してください。</p> <p>分野： 代数学、 幾何学、 解析学、 保険数学、 計算機科学、 応用数学</p>	<p>(1) 下にある(中区分の内訳)を参考にして、希望する中区分を下記の一覧から選び、下の枠内に記入して下さい。第 1 希望中区分は必ず書いてください。第 2 希望中区分は可能な限り書いてください。第 3 希望中区分については、希望しない場合は「なし」と記入してください。第 1 希望中区分、第 2 希望中区分、第 3 希望中区分に記入する中区分はすべて異なるものにしてください。また、希望する指導教員または希望する分野の詳細(例えば、代数幾何学、微分幾何学、偏微分方程式など)があれば、希望中区分の下の枠内に記入してください。ただし学際融合 1 の志願者は事前選抜に合格する必要があります。詳しくは募集要項の【17. 学際融合コース】を参照してください。</p> <p>中区分： 代数学 1、代数学 2、幾何学 1、幾何学 2、解析学 1、解析学 2、応用数学、保険数学、計算機科学、学際融合 1</p> <p>(中区分の内訳) 上記中区分の代数学 1、代数学 2、幾何学 1、幾何学 2、解析学 1、解析学 2、応</p>

	<p>用数学、学際融合 1 の分野の大きな内訳は以下の通りです。</p> <p>代数学 1 : 数論、表現論</p> <p>代数学 2 : 代数幾何学</p> <p>幾何学 1 : トポロジー</p> <p>幾何学 2 : 微分幾何学、離散群論、エルゴード理論</p> <p>解析学 1 : 偏微分方程式、実解析学</p> <p>解析学 2 : 確率論、関数解析、作用素環論、力学系</p> <p>応用数学 : 非線形解析、数理モデリング、データ解析</p> <p>学際融合 1 : 鍛冶静雄、数学・数理解析専攻（数学系）協力教員</p> <p>なお、学際融合 1 以外の中区分について、どの教員が所属するかは数学・数理解析専攻数学系のホームページ調べることができます。</p>
<p>QE 免除にならなかった場合に第一希望分野を保険数学に変更したい場合はここにチェックを記入してください。</p>	<p>（この行は削除。）</p>
<p>（2）志望する分野と関連する理論または定理で、志願者が興味を持ちかつ重要と思うものを一つ選び、その表題（またはその内容）とそれが重要であると思う理由を簡潔に記してください。下の欄が足りない場合は、A4 判の紙 1 枚のみ本紙に添付してもかまいません。</p>	<p>（2）(1)で記入した希望中区分ごとに、修士課程入学後に勉強あるいは研究したいテーマや内容についてレポートを作成し、本調査書に添付して提出してください。用紙のサイズは A4 サイズとし、長さは全体で 3 ページ以内とします。またレポートの初めに、レポート内容に関するキーワードを記載してください。</p>
<p>（3）特に勉強した書物・論文があれば記入してください。</p>	<p>（3）特に勉強した書物・論文があれば下の枠内に記入してください。</p>
<p>（4）これまでに勉強した数学の内容に関して、志願者自身によって得られた結果でオリジナルと思われるものがあれば、本調査書に添付してもかまいません。その際は内容を 4000 字程度以下にまと</p>	<p>（4）これまでに勉強した数学の内容に関して、志願者自身によって得られた結果でオリジナルと思われるものがあれば、本調査書に添付してもかまいません。その際は冒頭にタイトルをつけてくだ</p>

<p>めて、A4判の白紙にタイプしたものを印刷するか、A4判の紙にペンまたはボールペンで書いてください。</p>	<p>さい。また用紙のサイズは A4 サイズとし、長い場合は 1 ページ以内の概要をつけてください。</p>
--	--